

称名寺聖教『科註妙法蓮華經』小考

大平寛龍

はじめに

平成一八年（二〇〇六年）、金沢文庫の保管する「称名寺聖教」一三、〇二七点が、重要文化財に指定された¹⁾。そしてそれを記念して、同年に企画展「よみがえる鎌倉の学問」が開催された。その展示品の一つが、称名寺所蔵本『科註妙法蓮華經』（以下、称名寺本ないし称名寺本『科註』）であった。当企画展の図録である『よみがえる鎌倉の学問』では、称名寺本『科註』について、写真を掲載しながら以下のように紹介している。

浙江省四明山の天台寺院で開版された法華經の大型版本。元版と見られるが、現状では袋綴装となっている。亀養山長福禪寺の什物であったことを示す墨書があるが、どこの禪院であるかは未詳。巻第六にイチヨウと麻の葉が挟み込まれているのは防虫効果を期待したものらしい²⁾。

この短い紹介文には、称名寺本『科註』の書誌的方面に関する特徴が取り上げられている。それは、元版（中国の元代に刊行された典籍³⁾）と見られること、また現状では袋綴装となっていること、そして亀養山長福禪寺の什物であったことを示す墨書があるがどこの禪院であるか未詳であること、の三点である。そしてこの三点は、同

年に発行された『称名寺聖教目録』⁽⁴⁾にも記されている。⁽⁵⁾よってこれらの特徴は、称名寺本「科註」に関する公式な見解であると見られる。⁽⁶⁾

ただこれらの特徴に関する言及は、「よみがえる鎌倉の学問」と「称名寺聖教目録」に先行する諸文献において、龟養山長福禪寺を不詳とすること以外は、必ずしも一様ではなかった。それらを確認すると、書誌的観点から言及した川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」⁽⁷⁾、高橋秀栄編「金沢文庫保管版本目録」⁽⁸⁾（以下、「版本目録」）、図録「テーマ展 法華信仰」⁽⁹⁾（以下、「図録『法華信仰』」）が挙げられる。⁽¹⁰⁾そしてこれらにおいては、「元版」という点に関して、川瀬一馬氏が「鎌倉末期刊」であり「これも五山版の内であろう」、そして「直接基づく所は高麗版であろう」と述べている。⁽¹¹⁾また「版本目録」では「覆元刊（鎌倉版）」と述べ、図録「法華信仰」では「鎌倉時代」と紹介している。一方で、現状では袋綴装であるという称名寺本の形態に関して、川瀬一馬氏が「裏打改装」⁽¹²⁾が施されていることを指摘する一方で、「版本目録」では「枯葉」⁽¹³⁾と述べられており、また図録「法華信仰」では「原装は折本」⁽¹⁴⁾と記されている。このように従来においては、称名寺本「科註」の書誌的特徴に関して、様々な見解が示されてきた。このため、これらの点について如何に考えるべきなのか、という問題が存在する。

小稿ではこれらの問題を中心に、称名寺本「科註」は如何に位置づけられるべきものなのか、改めて検討したい。⁽¹⁷⁾それと共に、従来の諸見解についても、筆者の調査を踏まえつつ整理・検証を行っていきたい。そして称名寺本「科註」の実態について、僅かながらも解明に迫りたい。

一、称名寺本「科註妙法蓮華經」に関する基本的書誌情報について

初めに称名寺本「科註」に関する基本的な書誌情報について、「よみがえる鎌倉の学問」¹⁸や「称名寺聖教目録」¹⁹とともに先行する諸文献の見解も確認しつつ、筆者の調査結果も踏まえながら、検討していきたい。

まず表紙について川瀬一馬氏は、「原の藍色原表紙をも存し」²⁰していると指摘している。これについて筆者が調査したところ、表紙は完全な状態で残っているのではなく、後世の修繕作業で装丁された別の和紙による表紙の表面に、部分的に残存した原表紙と見られる藍色和紙が貼り付けられた状態にあった。それも全体に亘るものではなく、伝存する全五冊のうちの第四冊目の表表紙・裏表紙と、第五冊目の表表紙に貼られたものだけが残っている。色は多少変化している箇所もあるが、川瀬氏の指摘にあるように、これはもともと藍色の一角であったと見られる。よってこの藍色の和紙は、称名寺本「科註」の成立当初の表紙が、そのまま現在まで伝えられたものと考えられる。

こうした状態にある原表紙や後世に装丁された表紙には、外題は記されていない。ただ現状の第一冊目において、一丁表に刷られた経文本文の一行目には「科註妙法蓮華經 卷第三」の印字が見える（後掲の【図1】）。これによって「科註妙法蓮華經」が「称名寺聖教目録」などで内題として扱われたことが分かる。²¹

また「称名寺聖教目録」によれば、法量は縦寸三四・三cm、横寸二二・三cmとある。²²ただし筆者の調査によれば、裏打紙の天地においては、それぞれ約5mm×1cmほど空白を設けて原紙が貼り付けられていた。故にこの寸法は、裏打紙を計測したものとなる。ただその点を差し引いても、「よみがえる鎌倉の学問」で述べられているように、称名寺本は「大型版本」であると言える。

称名寺本の形態については、『よみがえる鎌倉の学問』が記すように、現状では袋綴装となっている。これについても筆者が調査したところ、称名寺本は川瀬氏が述べるように裏打改装されたものであるが、糸の綴じ目まで原紙は届いておらず、裏打紙に綴じ糸が通されている状態にあることを確認できた。即ち、裏打紙を本体とする袋綴装として装丁されている冊子本に、一丁分の原紙がそれぞれ山折りに半折されて貼られている。この現状に対して、原装を粘葉装あるいは折本と見立てたことに関しては、小稿の構成上、第三章で述べたい。

また川瀬氏は、称名寺本は「每半葉八行²³」であると述べている。ただし筆者の確認によれば、必ずしも每半葉八行で一定しているわけではなく、七行となっている箇所もあつた。なお経文本文については、基本的には一行一五文字となっている。

ところで先にも少し触れたように、現在伝わっている称名寺本は完本ではなく、凶録『法華信仰』で「残本五卷五冊」「存卷第三・四・五・六・七²⁴」と紹介されているように、第三卷と第七卷の冊子本が五冊残っている状態である。

これに関して川瀬一馬氏は、「八卷（有欠）五卷 五冊」「卷一・二・八を欠く」と記している²⁵。だが筆者が調査した所、「称名寺聖教目録」などには記されていないが、称名寺本『科註』は七卷本の妙法蓮華經に科註を施したものだ²⁶。よって称名寺本は、全七巻のうちの第一巻と第二巻を現状では欠いているということになる。

なお藍色の原表紙には、第四冊目に「六」、第五冊目に「七」と墨筆で記されているのを筆者は確認した。これは、現状の第四冊目が本来は第六冊目であり、現状の第五冊目が本来は第七冊目であったことを意味していると受け取れる。そしてこの現状の第五冊目、即ち本来の第七冊目において、法華經二十八品は終わっている。故に称名寺本は、川瀬氏の述べるように第八巻目を欠いているわけではないことが分かる。また、本来は全部で七冊

存在していたとも想像される。

さて『称名寺聖教目録』の「巻首・刊記」の項目には、第三卷に「四明信人習善徐行善書本將註入科経募縁刊」「四明海慧平稠沙門必昇校證」と記されていることが紹介されている。ここからは、中国の浙江省にある四明の徐行善という人物が法華経に科文を入れたこと、またそれを同じく四明の必昇という僧侶が校證したことが知られる。よつて称名寺本『科註』は、いわゆる倫註・徐註・如註と呼ばれる三種の『科註』のうちの、徐註であることが分かる。徐註とは、宋代の守倫註（『倫註』の印本の漂没を嘆いた徐行善が経文を分科し分註を施した、という校證者の必昇の言が記されているものである。この徐註は、中国の元代における元貞元年（一二九五）に作成されたことが伝わっている。元貞元年の成立を記す情報は、第一卷の経前録における必昇の「依天台科釈註法華経序」の箇所と、第七卷の末尾にある徐行善による跋文に記されていることが、後述する別本から確認できる。しかしながら、これも後に触れるように、称名寺本『科註』ではそれらの箇所が失われてしまっている。そのため現存する称名寺本からは、元貞元年成立の情報を直接知ることはできない。

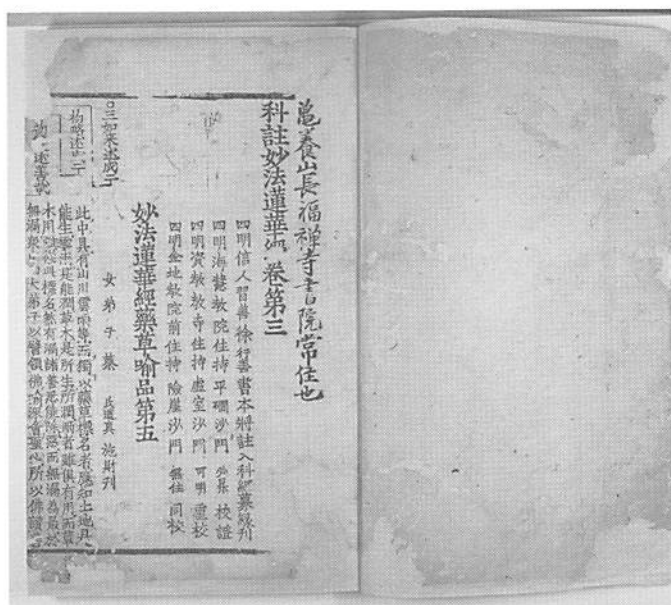
ところで、妙法蓮華経に科文を入れて『科註』を作成した徐行善は、『金剛経科釈』を刊行した元代の居士としても知られている。『金剛経科釈』には、「至元甲午年 四明 徐行善 謹誌」とあることから、至元三年（一二九四）に徐行善により『金剛経科釈』が刊行されたことが分かる。至元三年は、『科註』が作成された元貞元年（一二九五）の前年に当たる。これらのことから徐行善は、元朝の世祖クビライ（一二一五～一二九四）が滅して次代の成宗テムル（一二六五～一三〇七）に移る頃の元朝時代に活躍した人物だったことが分かる。故に、これらの要素により称名寺本が元版と判断された可能性も考えられる。他方で、図録『法華信仰』に「中国宋代の徐行善が刊行」したとあるのは見直されるべきであろう。

このように、「よみがえる鎌倉の学問」「称名寺聖教目録」で元版と見なされた称名寺本『科註』は、元代の徐行善や必昇によって元貞元年に作成された徐註であった。それは七巻本の妙法蓮華経を分科・分註したものであり、第三巻と第七巻が現存している。ただしその現行の形態は、裏打紙に綴じ糸を通した袋綴装となっている冊子本に、原紙を一丁ごとに半折して貼った状態にある。こうした称名寺本『科註』について、次章では版種の問題を中心として検討していきたい。

二、称名寺本『科註妙法蓮華経』の版種について

上述のように「よみがえる鎌倉の学問」と「称名寺聖教目録」では、称名寺本『科註』を元版と見なしている。一方で川瀬一馬氏は「鎌倉末期刊」の「五山版の内」であり、「直接基づく所は高麗版であろう」と述べている。⁽³³⁾ また「版本目録」では「覆元刊（鎌倉版^カ）」とし、図録「法華信仰」では「鎌倉時代」と記している。これらの諸見解で興味深いのは、川瀬氏・図録「法華信仰」が鎌倉期の刊行と見なしていること、また川瀬氏が「五山版の内」・「版本目録」が「覆元刊」と見なしている点である。そこでまずは、川瀬氏が「五山版の内」と見なしている点から、改めて検討していきたい。

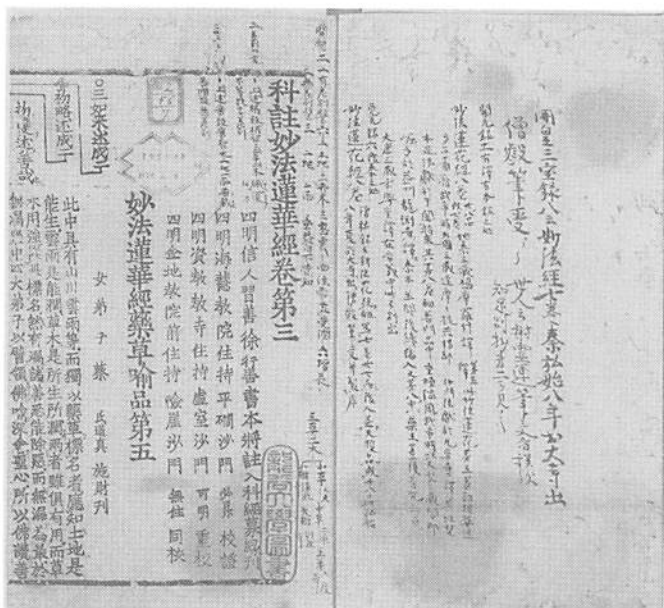
川瀬氏は著名な『五山版の研究』において、五山版と見なす『科註』を紹介している。⁽³⁶⁾ そこで取り上げられているのは、大東急記念文庫蔵本、米沢市立図書館蔵本、龍谷大学図書館蔵本、大谷大学図書館蔵本、松本文三郎博士旧蔵京都大学人文科学研究所蔵本、小汀文庫蔵本の六本である。これらのうち、小稿では龍谷大学図書館蔵本の『科註』（以下、龍谷本ないし龍谷本『科註』）と対照してみたい。龍谷本『科註』は、既に拙稿⁽³⁸⁾でも記したよ



うに、川瀬氏により摺刷の良い初印本の五山版と見なされたものである⁹⁾。現在では保存されている全巻の画像がインターネット上で公開されており、容易に閲覧することが可能である¹⁰⁾。

ここではその一例として、第三巻の冒頭部（葉草論品第五）について、称名寺本『科註』（図1）と龍谷本『科註』（図2）との対照を試みたい。両本を対照すると、一丁表に刷られた刻字の形や字数、行数など、その版式が一致していることが明らかである。

筆者の調査によれば、龍谷本の法量は縦寸約三二cm、横寸約一九cmであり、称名寺本より若干小さいが、称名寺本の原紙は現状で天地合わせて約一・五cm短いことを考慮すれば、両本はほぼ同じ大きさで見なせる。またその両本においては、同様の内容がそれぞれ半丁内に収められて刷られている。これらにより両本の版種は、同様のものと見ることができる。



【図2】 龍谷大学図書館所蔵本『科註妙法蓮華經』第三卷冒頭部

さらには、川瀬氏により後印本の五山版と見なされている大谷大学図書館蔵本の『科註』（以下、大谷本ないし大谷本『科註』）（図3）とも対照しておきたい。龍谷本と同じく、その版式や内容が大谷本とも一致していることが明らかである。これらから称名寺本『科註』は、龍谷本『科註』や大谷本『科註』と同じ版種のものと考えられる。よって川瀬一馬氏の見解に基づくならば、称名寺本『科註』もまた、五山版であるということになる。

称名寺本『科註』に対する見解を記した川瀬氏の「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」は、『五山版の研究』が発行された翌年に『金沢文庫研究』で発表されたものである。そしてその称名寺本に対する川瀬氏の見解は、言うまでもなく『五山版の研究』における研究蓄積に基本的には基づいたものと考えられる。

一例を挙げると、第一章で触れたように、川瀬



【図3】大谷大学図書館所蔵本『科註妙法蓮華經』第三卷冒頭部

氏は称名寺本の表紙について「原の藍色原表紙をも存し」^①ていると指摘している。こうした表紙に
関して川瀬氏は『五山版の研究』で、五山版以外の
同時代の書物では打ち曇りその他の文様のある
色紙を用いているが、五山版においては例外なく
全て藍色もしくは淡青色、または朱色・淡紅色・
茶褐色・黄色・香色などひとりの染紙に限られ
ている、と述べている。川瀬氏はこのような「五
山版の研究」の見解に基づいて、残存する称名寺
本の藍色表紙を「原表紙」と判定したということ
になる。

その『五山版の研究』において川瀬氏は、龍谷
本や大谷本など五山版と見なす「科註妙法蓮華
經」（以下、「科註」）を、鎌倉末期の覆元刊本（元
版を覆刻したもの）であり、高麗刊本の覆刻本の
好例かと思われる、と評価している^②。よって先に
挙げた「版本目録」に「覆元刊」^③とある点につい
ては、川瀬氏の見解と通ずる面があることが分か

る。ただし「鎌倉版⁴⁵」という点については、更なる検証を要するため、今後の課題としておきたい。

また高麗刊本の覆刻版とする点については、川瀬氏は同著において、「総じて五山版の版型は大型のものは稀⁴⁶」であると述べる一方、「海外からの版式の影響については、直接大陸のそれを受けてゐる中に、僅かに朝鮮の古版本を仲介として覆刻を行つてゐる場合もある」とも述べている。よつて川瀬氏が称名寺本について「直接に基づく所は高麗版であろう」と述べていることについても、こうした「五山版の研究」の見解に基づいてのことと思われる。故に称名寺本が「大型版本」という特徴を有しているのは、このように高麗刊本の覆刻版と見なされている要素によるためだと言へる。

なお五山版と見られる「科註」を川瀬氏が鎌倉末期刊と見なしていることについては、図録『法華信仰』の「鎌倉時代⁴⁶」とする見方と通ずる点がある。またそれは、次章で述べるように、称名寺本が鎌倉時代に普通だったとされる片面に二丁分の版本と見られることと深く関わっていると思われる。もっともこれに関しては、「川瀬氏「五山版の研究」に鎌倉末期としてあるが、あるいは多少し下るものであるうか」と述べつつ「南北朝時代頃刊」とする見方も提唱されており、他方で徐行善の「科註」が日本に伝来したのは「恐らく足利初期ではなからうか」とする意見もある⁴⁸。これら諸説については、現在の筆者の能力を超える問題であるため、ここでは深く立ち入らないでおきたい。

ただ「版本目録」の「覆元刊」、図録『法華信仰』の「鎌倉時代」という捉え方は、このように川瀬氏の「五山版の研究」の見解を踏まえると、より具体的な様相を帯びて浮かび上がってくる。このことは、称名寺本と龍谷本・大谷本の版式が一致した事実によつて、さらに後押しされるものと思われる。これらの考察を踏まえて川瀬氏の見解に依るならば、称名寺本は覆元刊本、それも高麗刊本の覆刻版である五山版と見られるものというこ

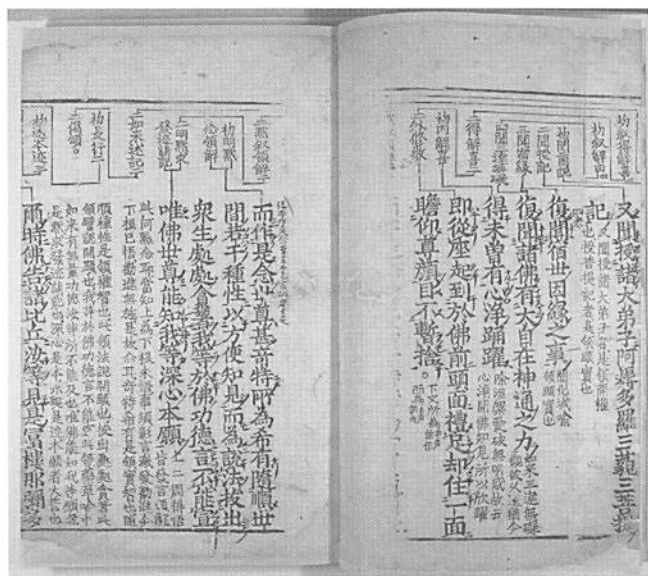
となる。そうであるならば、称名寺本『科註』は川瀬氏に五山版と見なされた版種でありながら、『五山版の研究』には収録されていなかった一本であると位置づけられよう。

三、称名寺本『科註妙法蓮華經』の形態について

さて先に触れたように、現状が袋綴装となつている称名寺本『科註』は、川瀬氏の指摘するように「裏打改装」⁴⁹が施されたものである。それは上述のように、裏打紙を糸綴じして袋綴装とした冊子本に、一丁ごとに山折り半折された称名寺本の原紙が貼られた状態となつている。従つて、原紙には糸綴じ穴が存在しない。この現状を認識しつつ、「版本目録」では称名寺本の原装を「粘葉」⁵⁰と判定し、また図録「法華信仰」では「折本」⁵¹と判定したと思われる。ではその原装は如何なる形態のものであったのであろうか。

称名寺本『科註』の形態について考える上で見逃せないのが、称名寺本の随所に散見する刷り残しの印象である。一例を挙げると、第四卷（第二冊目）の「五百弟子受記品第八」冒頭部に続く一丁裏の左端には、隣接する二丁表の一行目にある「而作是念世尊甚奇特所爲希有隨順世」の経文や、その経文に対する「二黙叙領解二」という科文の刷り残しを確認することができる（図4）。

この箇所について、日隆聖人（以下、隆師）（一三八五〜一四六四）が所持していた尼崎市本興寺所蔵本の『科註』（以下、隆師本ないし隆師本『科註』）（図5）と対照することは、称名寺本に刷り残しが附随した事情を理解するに当たつて、一つの補助線を提示してくれると思われる。なぜなら、既に拙稿で論じたように、同じく五山版と見られる隆師本『科註』は、現状の形態には後世の手が加えられたものであるものの、当初から卷子本とし



【図4】 称名寺所蔵『科註妙法蓮華經』第四卷「五百弟子受記品第八」一丁裏・二丁表（写真提供：金沢文庫）

て伝わっていると見られるものだからである。⁽³³⁾ 五山版と見られる「科註」には冊子本のみならず卷子本として伝わる隆師本「科註」も存在するという事実は、五山版と見られる「科註」が作成される際には、同様の版木を用いながら、冊子本と卷子本とに刷り分けられていたことを意味している。⁽³⁴⁾ そしてこれと深く関わっていると思われるのが、先に指摘した称名寺本第四卷の一丁裏にある隣接丁の刷り残しの印像（図4）が隆師本における同じ箇所（図5）には付随していないこと、またその箇所の行間も他と同様の幅となっていることである。

ところで住吉朋彦氏によれば、五山版以前、鎌倉時代の冊子用の版木は、片面に二張、表裏で四張一片の様式が普通であった。⁽³⁵⁾ これについて住吉氏は、両面刷りとする都合もあったであろうが、潜在的には、平安時代以来の長版による卷子本や、折本用の版木の様式に連続するのではないかと推



【図5】日隆聖人所持本「科註妙法蓮華經」第四卷「五百弟子受記品第八」（尼崎市本興寺所蔵）

測している。だが、貞治六年（一三六七）に福州から集団で渡来した来朝刻工の刊版に、六張一片（一面に三張ずつ、表裏で六張分を一片に刻んだ版木の様式を指す）の版木が見られるようになったという。ただし中国で商業出版に関わった来朝刻工は、長版による冊子本の印刷に通じていなかったため、隣接張の一部が映ってしまう結果を招いたのであろうとも住吉氏は推論している。そしてこのような結果が許容されたのは、両側に附随する余計な印像が書脳に隠れてほとんど見えなくなる袋綴の装訂が前提とされていたからであり、そうであるならば五山版は早期には胡蝶装で行われたものの、中後期は初めから袋綴装で装訂されたことになるかと論じている。

住吉氏の主張を踏まえながら称名寺本にある隣接丁の刷り残しの印像に着目してみると、筆者の調査によれば、基本的には奇数丁の裏面における綴じ目に近い余白に附随していた。それは全五冊しか残存しない称名寺本のみならず、全七冊が残る龍谷本も同様であった。例外なのは、偶数丁の表面における綴じ目に近い余白に附随したものが挙げられる。だがこの両者は、綴じ目を挟んで左右に位置する関係にある。この事から想起さ

れるのは、称名寺本『科註』の版木が住吉氏の述べる「片面に二張」の様式、即ち版木の一面で二丁分ずつ刷る様式となっていることである。これは、隆師本『科註』が卷子本で伝わっている事実も併せて考えると、称名寺本『科註』の版木は卷子本を刷るための一面二丁分の内容を有する長版であったことになる。従って、この場合の版木における二丁分の本文内容の順序は、第一半丁（二丁表）、第二半丁（二丁裏）、第三半丁（二丁表）、第四半丁（二丁裏）が連続する「一・二、三・四」の配置であると推定される。故にその版木を用いて一丁分ずつ分けて刷ったことから、奇数丁裏（即ち第二半丁）の最終行の左隣となる綴じ目近くの余白部分に、続く偶数丁表（即ち第三半丁）の一行目（即ち隣接丁）が映ってしまふ結果を招いたと考えられる。そのため、偶数丁表の一行目の右隣となる綴じ目側の余白部分には、その手前の奇数丁裏の最終行が映ってしまふことも起こり得ることになる。これらのことから、隣接丁における余計な印像が附随してしまつたのは、こうした一面二丁分の内容を持つ長版を用いて、一丁分ごとに料紙を分けて刷つたことに由来すると考えられる。

なお現在において知られる限りでは、中国や朝鮮の版木はみな表裏とも一丁ずつの短版であり、一面二丁以上の長版の存在を聞かないとされる。⁵⁶ そうであるならば、一面二丁の長版と見られる称名寺本『科註』を元版と見なせる可能性は、より低くなると思われる。また上述の住吉氏の説明によれば、五山版以前の鎌倉時代の冊子用の版木は「片面に二張」、即ち一面二丁の様式が普通であったという。この点は、称名寺本『科註』が鎌倉時代のものと思なされたことと通ずる面がある。

ところでこの一丁分の料紙を、谷折りにして装丁するならば粘葉装ないし胡蝶装が可能であり、山折りにして装丁するならば袋綴装が可能である。

ここで意識しておきたい要素の一つは、称名寺本『科註』に左右の匡郭と版心が無い点である。上述のように、

称名寺本『科註』は卷子本を刷ることを念頭においた一面二丁分の内容を有する長版であることから、隆師本からも明らかのように、左右の匡郭と版心がないのは不思議ではないように見える。そうであるならば、冊子として装丁するならば粘葉装という選択肢が自然であるようにも感じられる。例えば粘葉装に適していると思われるのが、称名寺本では失われた第一巻に収録される「法華諸品起盡之圖」である。これは法華経二十八品の構成について、罫線を用いて分類しながら図式化したものである。別本の龍谷本においては、第一冊の「序之十」の一丁表・裏の全体にわたって収録されている。しかしながら、現状が袋綴装となつている龍谷本では、一丁分が山折りになつて綴じられていることから、読者が見開いたときには半丁ずつしか図を目にすることができない。従つてこの図の全体像を見開きで目にするようにすることができるようにするならば、粘葉装が適しているように見える。さらに興味深いのは、小稿冒頭の引用にあるように、称名寺本『科註』巻第六には防虫効果の期待をこめたと思われるイチヨウと麻の葉が挟み込まれている点である。「よみがえる鎌倉の学問」にある「粘葉装とイチヨウの葉」の解説によれば、粘葉装などにおける糊の部分に紙魚が好むため、そこが虫損になる場合が多いという⁽⁵⁷⁾。そのためか、『科註』に限らず称名寺聖教の中にはまれにイチヨウや麻の葉をはさんだものがあるとされる。よつて称名寺本『科註』の原装が粘葉装と見なされたのは、こうした事情が背景にある中で、称名寺本にイチヨウや麻の葉が挟み込まれていることも一因であつた可能性が考えられる。

ただここで気になるのは、先にも挙げた刷り残しの印像の問題である。なぜなら、仮に粘葉装で装丁した場合、一紙を谷折りに半折して装丁することから、先に指摘した奇数丁裏の左端の余白に附随するこの余計な印像が、料紙をめくる度目につくようになると思われるからである。つまり粘葉装として見開いた時には、見開き面の左端の余白などに、この刷り残しの印像が位置することになり、目立つようになってしまう。これは読者にとつ

て好ましいものではなく、刷った者にとつても刷り残しをわざわざ見せることになるであろう。従つて粘葉装とするならば、可能な限り刷り残しの印象は残らないように刷るのが自然であると思われる。

なお鎌倉時代の粘葉装冊子版本に関しては、一紙両面で半丁四面分に対応するように設定された版本における本文の順序が、先に推定した「一・二、三・四」の配置とは異なる「四・一、二・三」であるものが確認されている。⁽⁸⁾この場合、一紙を半折して各半葉の表裏を使用し、紙葉の裏から表へ、また表から裏へと続くことから、料紙と本文との対応関係は、第一半丁と第二半丁が裏表、また第三半丁と第四半丁が表裏の関係となる。これを一紙の表裏として考えると、裏面に第一半丁と第四半丁、表面に第二半丁と第三半丁が配置され、それぞれを一組とすることで一丁分ずつの印刷が可能となる。そして実際に、本文の順序を入れ換え、「四・一、二・三」と続のように配置されて彫られている当時の版本が現存していることが知られている。

従つて「四・一、二・三」の配置においては、「一」（第一半丁）と「二」（第二半丁）の本文が版木の片面では並んでいるものの、刷る際には一紙の裏と表という位置関係となることから、仮に刷り残しが附随するのであれば、それはこの「一」と「二」の首尾行となるのではないだろうか。また「二」（第二半丁）と「三」（第三半丁）の本文は版木上で並んでいる上に、一紙の同じ紙面に刷るため、刷り残しが映らないことも想像される。だが称名寺本で実際に附随している刷り残しは、「二」と「三」の首尾行の箇所である。そして筆者が確認した限りでは、「一」と「二」の箇所においては、称名寺本・龍谷本ともに刷り残しは見当たらなかった。そればかりでなく、「一」と「二」の境界は、現状の称名寺本で山折りされた一紙の折り目に当たっており、それは後の箇所も同様であった。故に称名寺本に刷り残しが附随した事由については、上述した「一・二、三・四」の内容順の版本が適する可能性が高いと見られ、一紙両面刷りの粘葉装に対応した「四・一、二・三」の内容順の版本が

適する可能性は低いように思われる。

このように見た場合に示唆的なのが、先に挙げた住吉朋彦氏の指摘である。住吉氏は、綴じ目に近い余白に印像が映るのが許容されたのは、袋綴装として綴じたときにその余計な印像が書脳部に隠れてほとんど見えなくすること、それ故に当初から袋綴装として装丁されることが前提とされていたと考えられることの可能性を挙げている。しかも上述の「一・二、三・四」の配置の版木は、袋綴装に適したもののように見える。よってこうした見方は、龍谷本や称名寺本などの『科註』に刷り残しの印像が多く散見する事情を考察する上で、手がかりを与えてくれるようにも感じられる。

そこで現状として袋綴装として装丁されている龍谷本を確認すると、原紙に通されている綴じ目の近くに刷り残しが映っている箇所もあり、しかも見開いた状態のときにはそれが書脳の奥にあるために目に入ることが無いような箇所も多々存在していた。ただ、現状としては袋綴装である龍谷本が原装のまま伝わっている保証がないこともあり、この点については改めて検討せざるを得ない。

また住吉氏が取り上げたのは「六張一片」の版木についてであり、「片面二張」即ち一面二丁分の称名寺本『科註』の版木とは事情も異なる⁽⁹⁾。加えて称名寺本『科註』については、五山版以前の鎌倉時代の冊子用の版木として普通だったとされる一面二丁の様式と見られるものであることから、上述のように諸説あるその年代を如何に見定めるべきなのか、といった問題も存在している。

さらに留意すべきは、五山版の装丁は鎌倉末期から南北朝まではほとんどが包背装（くるみ表紙、包み表紙）であると『五山版の研究』に述べられていることである⁽¹⁰⁾。従って川瀬氏の見解も考慮に入れるならば、包背装の可能性も考えられる。仮にもし包背装であったならば、料紙を山折りにして装丁した場合、刷り残しの印像は綴

じ代側となり、袋綴装と同様に目立たなくなる。また表紙をかぶせて背をくるみ、背と綴じ代に当たる部分を糊付けすることから、上述したイチヨウや麻の葉が挟み込まれていた事情とも結びつき得る。

ただし現時点においては様々な可能性の域を超えるものではないため、原装を粘葉装、袋綴装、包背装のいずれと見るべきかについては結論づけることはできない。従ってここでは筆者の調査に基づいて得られた知見のみを記し、性急に結論を求めることは止めておきたい。

ただ、これらの調査結果を踏まえて一点だけ指摘できるとすれば、それは原装を折本とする見方は適さないのではないか、ということである。もし称名寺本の原装が折本であったとするならば、刷り残しが附随することのない、隆師本のような卷子本として装丁が可能な形態で刷った上で折った方が適切と思われるからである。よってこの見地からすれば、原装を折本と見る見解は斥けられることになるであろう。

このように、『科註』に残された刷り残しの印像は、五山版と見られる称名寺本『科註』の書誌的な事情を解明していく上で糸口の一つであるといえる。よって刷り残しの印像は、五山版と見られる冊子本『科註』の特徴の一つと見なすことができよう。

四、称名寺本『科註妙法蓮華經』と龍谷本『科註妙法蓮華經』との調卷内容の対照

ところで繰り返し述べているように、称名寺本『科註』は一面二丁分の内容を有する版木とみられる。よって冊子として作成する際には、予め刷る分量が設定されていたことが想定される。そうであるならば、冊子本『科註』の内容はどれも同様となるはずである。そこで、称名寺本と龍谷本の調卷内容を対照してみたい。

『称名寺聖教目録』によれば、称名寺本の紙数は、それぞれ第三卷（六一丁）、第四卷（七五丁）、第五卷（七〇丁）、第六卷（六〇丁）、第七卷（五八丁）と記録されている。ただしこれは、筆者が調べたところ、何も刷られていない内表紙なども含む紙数を指したものだ。よって内表紙などを含んだ紙数で龍谷本や大谷本などと対比したならば、後世の改装などの事情で各本の紙数が異なっている可能性もある。そこで小稿では、刷られた紙数だけを対象としてその丁数を取り上げ、対比してみた。

筆者の調査によれば、内表紙などを含めない刷られた料紙のみを対象とした称名寺本の紙数は、半丁分まで記すと、それぞれ第三卷（六一丁表）、第四卷（七二丁表）、第五卷（六八丁裏）、第六卷（五六丁裏）、第七卷（五六丁表）であった。ただし、これも『称名寺聖教目録』などには記されていないが、第五卷の末尾の一丁（表・裏）分と、先にも触れた徐行善による跋文のある第七卷の末尾の一丁（裏）分が、現在では失われている。この点は、龍谷本『科註』との対照によって判明した。よって本来ならば、これらの刷られた料紙の紙数はそれぞれ、第五卷（六九丁裏まで）、第七卷（五六丁裏まで）であったといえる。

また称名寺本の各巻に収録される品名と、各品が刷られている箇所は、以下の通りである。

第三卷 葉草諭品第五（二丁表〜一五丁裏）、授記品第六（一五丁裏〜二五丁表）、化城諭品第七（二五丁裏〜六一丁表）

第四卷 五百弟子授記品第八（二丁表〜一四丁裏）、授学無学人記品第九（一四丁裏〜二〇丁裏）、法師品第一〇（二二丁表〜三五丁表）、見宝塔品第一一（三五丁表〜四九丁裏）、提婆達多品第一二（五〇丁表〜六四丁裏）、持品第一三（六四丁裏〜七一丁表）

第五卷 安樂行品第一四（二丁表〜二二丁裏）、從地涌出品第一五（二二丁裏〜三八丁表）、如来寿量品第一六

（三八丁表～五五丁裏）、分別功德品第一七（五六丁表～六八丁裏）

第六卷 隨喜功德品第一八（二丁表～八丁裏）、法師功德品第一九（八丁裏～二三丁表）、常不輕菩薩品第二〇

（二三丁表～三三丁表）、如來神力品第二二（三三丁表～三八丁裏）、囑累品第二三（三八丁裏～四一丁裏）、

樂王菩薩本事品第二三（四二丁表～五六丁表）

第七卷 妙音菩薩品第二四（二丁表～一二丁裏）、觀世音菩薩普門品第二五（一二丁裏～三〇丁裏）、陀羅尼品第

二六（三〇丁裏～三七丁裏）、妙莊嚴王本事品第二七（三八丁表～四七丁表）、普賢菩薩歎發品第二八（四七丁表～五六丁表）、跋文（冒頭のみ）（五六丁表）

以上の調卷内容については、筆者の調査の結果、龍谷本「科註」と基本的に一致した。現状における龍谷本との差異を挙げるとするならば、まず一点目は、上述のように第五卷と第七卷において、称名寺本はそれぞれ末尾の一丁分と半丁分を欠いている点である。この点は言うまでもなく、両本の版や刷る配分が異なることを示すものではない。もう一点は、第六卷の最終行にある「妙法蓮華經卷第六」という一行が、龍谷本では五六丁裏に刷られているのに対し、称名寺本では五六丁表内に収められて刷られているため、半丁分だけ紙数が少なくなっている点である。だがこれも、両本の版や刷る配分が大きく異なることを示す要素とは見せない。むしろこの点は、両本が基本的には同様の調卷内容で刷られることを前提とされながら、長版の用い方に若干の差異が生じたことを示すものと見られる。と共にこれは、予め設定された配分で刷ることで、できる限り一丁ごとの内容を整えようとした意識があったことを裏付けるものでもある。加えて興味深いのは、筆者の調査によれば、折り目に掛かってしまっている印字はほぼ無かった点である。これは版心が無いにも関わらず、一丁分の折り目の位置に印字がかからないように、版木が作成されていたことを想像させるものである。

故にこれらの諸要素も、同様の長版を用いて一丁ごとに刷った後、半折したその料紙を冊子として装丁するのを前提としていたことを示唆するものと考えられる。よって称名寺本『科註』の版木には、長版でありながら冊子用のための周到な設定が施されていたと見るべきではないだろうか。

おわりに

以上、称名寺本『科註』について少しく考察を試みてきた。小稿の検証を通じて得られた知見は以下のようなものである。

従来は元版と見られてきた称名寺本『科註』は、龍谷本『科註』や大谷本『科註』と版式が一致したことから、川瀬一馬氏の見解に基づくならば、鎌倉末期の覆元刊本であり、しかも高麗刊本の覆刻本である五山版と見られることが判明した。ただし現状では裏打改装を施されて袋綴装となつている称名寺本の原装については、粘葉装、袋綴装、包背装のいずれであつたのか、結論づけることはできなかった。

ただ、称名寺本の形態について考える上で見過ごせないのが、称名寺本に散見する隣接丁の余計な刷り残しの印像である。これについて筆者が調査したところ、称名寺本のみならず、全冊の残る龍谷本『科註』においても、刷り残しの印像は奇数丁裏もしくは偶数丁表の綴じ目側に附随しているのが判明した。この両者は、綴じ目を挟んで連続する関係に位置している。よって隆師本『科註』が卷子本で伝わっている事実も含めると、称名寺本の版木は卷子本を刷る様式の延長にある一面二丁の長版であると考えられる。そしてその場合の版木における二丁分の内容は、第一半丁から第四半丁までの本文の順序が、「一・二、三・四」と続いて配置されて雕刻されたも

のと推測される。なお住吉朋彦氏によれば、五山版以前の鎌倉時代の冊子用の版木は一面二丁の様式が普通であったとされており、称名寺本が鎌倉期のものと見なされたことと通ずる面がある。また中国や朝鮮の版木は片面一丁ずつの短版であり、一面二丁以上の長版の存在を聞かないとされていることは、称名寺本を元版と見なせる可能性をさらに低くするものとも思われる。

さて、この版木で刷られた称名寺本の原装が粘葉装と見なされたのは、版心や左右の匡郭がないことや、防虫効果を期待されたと思われるイチヨウや麻の葉が挟み込まれていることも一因と考えられる。だが粘葉装であれば、見開いた印刷面の左端などに刷り残しの印像が目につくようになり、その点は望ましくないように感じられる。また鎌倉時代の一紙両面で半丁四面分を刷る粘葉装冊子版本に対応した二面二丁の版木は、本文の順序が「四・一、一・三」という配置になっているものが現存するという。故にこの版木で刷った場合、「一」（第一半丁）と「二」（第二半丁）の本文は版木上では並んでいるものの、刷った際には一紙の裏表の位置関係となることから、仮に刷り残しが附随するとすれば、この「一」と「二」の首尾行となり、「二」（第二半丁）と「三」（第三半丁）の首尾行の刷り残しは映らないことが想像される。だがそれは、称名寺本や龍谷本では第二半丁と第三半丁の首尾行の刷り残しが附随している事実と適合しない可能性が高いと思われる。他方で「一・二、三・四」の配置の版木は、称名寺本や龍谷本に映る刷り残しの位置と適合する可能性が高いと考えられるものであり、さらにこれは袋綴装に適するものとも思われる。ここで示唆的なのが、長版を用いて附随した刷り残しの印像が許容されたのは、書脳部分に隠れることを念頭とした袋綴装を前提としていたと見る住吉朋彦氏の六張一版の説である。原紙に綴じ糸が通された袋綴装となっている現状の龍谷本を見開いた時、この刷り残しの印像は綴じ代の奥となって目立たなくなっている箇所もあることから、住吉氏の主張には称名寺本の原装を袋綴装と仮定した場合

に適する面があるようにも感じられる。ただ龍谷本が原装のままである保証はなく、また住吉氏の説は六張一版について述べたもので一面二丁とは事情が異なっている。加えて、鎌倉末期から南北朝までは五山版のほとんどが包背装であったと述べる『五山版の研究』の見解を考慮に入れるならば、称名寺本は包背装であった可能性も考えられる。仮に包背装であれば、刷り残しの印象は袋綴装と同様に綴じ代側に位置するため目立ちにくくなり、また包み表紙と背の部分糊で付けることから、防虫効果を期待してイチヨウや麻の葉を挟みこんだ事情とも結びつくこととなる。しかしながら、原装に関するこれらの考察は可能性を探ったものに過ぎないため、性急に結論を求めるのは止めておきたい。ただ、称名寺本と龍谷本の調巻内容が基本的には一致したことにより、五山版と見られる『科註』は、冊子本として一丁ごとの刷る分量が予め設定されていた長版であったと見ることができ、それは折り目に印字がほぼ掛かっていないことも関係していると思われる。

以上の検証結果からは、称名寺本『科註』は龍谷本『科註』などと同様の一面二丁の長版を用いて作成されたものであり、また川瀬一馬氏が五山版と見なした版種において『五山版の研究』の収録から洩れていた一本ということになる。そして以上のような見地からすれば、原装を折本とする考え方は認容され得ないこととなる。なお近年においては、五山版の定義を如何に見るかという問題が改めて議論されており、川瀬一馬氏の『五山版の研究』についても、今後は大きく見直しが図られていく可能性もある⁽⁶⁾。ただ、称名寺本や龍谷本などに散見する刷り残しの印像の問題は、称名寺本を元版とする見方を積極的に支持する要素とはなり得にくいのではないだろうか。そしてこの問題を考える上でも、希少な卷子本形態で伝わる隆師本『科註』の存在はますます重要となってくるであろう。称名寺本『科註』を扱う際には、小稿で考察してきたこれらの点について、今後は十分に注意を払う必要があるように思われるのである。

註

- (1) なお金沢文庫が管理する「金沢文庫文書」（四一四九点）と「称名寺聖教」（一六六九二点）は、その後の二〇一六年八月、国宝に指定された。永村真「金沢文庫文書・称名寺聖教の国宝指定とその意義」『金沢文庫研究』第三三八号、二〇一七年三月、六〇八頁。
- (2) 金沢県立金沢文庫編「よみがえる鎌倉の学問」〔称名寺聖教〕重要文化財指定記念企画展、神奈川県立金沢文庫、二〇〇六年、一一頁。
- (3) 尾崎雄二郎・竺沙雅章・戸川芳郎編『中国文化史大事典』大修館書店、二〇一三年、三三二頁。
- (4) 文化庁文化財部美術学芸課「称名寺聖教目録」（一）、文化庁文化財部美術学芸課、二〇〇六年、七三〇～七四頁。
- (5) ただ「称名寺聖教目録」（一）には、「亀養山長福禪院常住也」の墨書があることは記載されているが、どこかの禪院か不詳であることは記されていない。前掲『称名寺聖教目録』（二）七三〇～七四頁。
- (6) 朴鎔辰「元代『科註妙法蓮華經』の刊行と流通」『印度学仏教学研究』通号一三八号、二〇一六年三月では、こうした「称名寺聖教目録」の見解に基づいて称名寺本「科註妙法蓮華經」を取り上げ論じており、龍谷本「科註妙法蓮華經」も「元刊本」として扱っている。
- (7) 川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」『金沢文庫研究』第一七卷第八号（通卷一八四号）、一九七一年八月、一一頁。
- (8) 高橋秀栄編「金沢文庫保管版本目録」（以下、高橋秀栄編「版本目録」）『金沢文庫研究』第二五卷第四・五号（通卷二五八・二五九号）、一九七九年九月、一一頁。
- (9) 神奈川県立金沢文庫編「テーマ展 法華信仰」（以下、図録「法華信仰」）神奈川県立金沢文庫、一九九六年、五四頁。

- (10) この他、金沢文庫に保管されている天台典籍の一つとして称名寺本「科註」を挙げて以下の文献があるが、小稿における関心の対象から外れるため、紹介するにとどめておく。塩入良道・池田魯参「金沢文庫の天台典籍」『金沢文庫研究』第三三巻五号（通巻二四七号）、一九七七年一〇月、一頁。
- (11) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (12) 前掲、高橋秀栄編「版本目録」一一頁。
- (13) 前掲、図録「法華信仰」五四頁。
- (14) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (15) 前掲、高橋秀栄編「版本目録」一一頁。
- (16) 前掲、図録「法華信仰」五四頁。
- (17) 不詳とされている亀養山長福禪寺については、別の機会を期したい。
- (18) 小稿では、特に断りが無い限り本書に関しては以下に依る。前掲「よみがえる鎌倉の学問」一一頁。
- (19) 小稿では、特に断りが無い限り本書に関しては以下に依る。前掲「称名寺聖教目録」(一)、七三〜七四頁。
- (20) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (21) なお第一冊目においては、一行目に刷られている「科註妙法蓮華経 卷第三」の右隣に「亀養山長福禪寺書院常住也」の語が書き込まれている。【図一】を参照。
- (22) なお川瀬一馬氏は「紙幅一尺一寸一分。界高約八寸九分」、「版本目録」では「紙高三二・九cm」と記してある。前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。前掲、高橋秀栄編「版本目録」一一頁。
- (23) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (24) 前掲、図説「法華信仰」五四頁。
- (25) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。

- (26) これに関しては、図録「法華信仰」では「科註妙法蓮華經」は羅什訳の「法華經」を七巻にわけ、それぞれ適当に各品の科段を設けて注釈をつけたもの」と解説されている（前掲、図録「法華信仰」五四頁）。
- (27) 三種の「科註」については、拙稿「日隆聖人御所持『心空嘉慶版妙法蓮華經』「科註妙法蓮華經」小考」『桂林学叢』第二五号、二〇一四年三月、二〇六～二〇七頁。
- (28) 経前録とは、第一巻において、経文の本文の最初である「妙法蓮華經序品第一」の標題に至るまでに収録された、法華經に関する種々の解説文の箇所を指す。五山版と見られる「科註」の当該箇所の冒頭には、「科註妙法蓮華經經前録天台疏諸義」（※筆者注、傍線は筆者が付した）という標題が記されており、これに基づいて筆者はこの箇所を経前録と呼んでいる。拙稿「本国寺日伝写本「科註妙法蓮華經」に関する一考察」『興風』第三三号、二〇二一年一月、二六八～二七四頁。
- (29) 中國佛教人名大辞典編輯委員會編『中國佛教人名大辞典』上海辞書出版社、一九九九年、八七七頁。
- (30) 西義雄ほか監修『大日本統蔵經』第二四卷、国書刊行会、一九七五年、六三五頁c。
- (31) 「金剛經科積」の解題に、河村考照『大日本統蔵經』解題（五）『国書刊行会、出版年不詳、一三九～一四一頁がある。
- (32) 前掲、図録「法華信仰」五四頁。また川瀬一馬氏が「各冊首に原の宋版本の募縁刊記が見える」と述べている点についても、疑問符が付く（前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁）。なお各冊首の募縁刊記の調査については今後の課題としておきたい。
- (33) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (34) 前掲、高橋秀栄編「版本目録」一一頁。
- (35) 前掲、図録「法華信仰」五四頁。
- (36) 川瀬一馬「五山版の研究」上巻（研究篇）、日本古書籍協会、一九七〇年、九三、二三〇、三六一～三六二頁。

- (37) ただし小汀文庫蔵本『科註妙法蓮華經』は、一九七二年五月に日本橋三越で行われた大入札会で放出されている。「小汀文庫稀書珍本展観入札目録」東京古典会、一九七二年、一〇、六五頁。反町茂雄「蒐集家・業界・業界人」八木書店、一九八四年、二〇六～二〇八頁。
- (38) 前掲、拙稿「日隆聖人御所持「心空嘉慶版妙法蓮華經」『科註妙法蓮華經』小考」二二五～二二二頁。
- (39) 前掲、川瀬一馬「五山版の研究」上巻、九三頁、二三〇頁。
- (40) 龍谷大学図書館に所蔵される貴重資料の画像データベース「龍谷蔵」(龍谷大学図書館 貴重資料画像データベース)が近年公開されている。この「龍谷蔵」において、龍谷本『科註』も公開されている (http://www.afc.ryukoku.ac.jp/kicho/cont_13/13231.html?0&q=%E7%A7%91%E8%A8%BB%E5%A6%99%E6%B3%95%E8%93%E8%8F%AF%E7%B5%8C)。〔最終確認日二〇一二年九月三日〕。
- (41) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (42) 前掲、川瀬一馬「五山版の研究」上巻、四一頁。
- (43) 前掲、川瀬一馬「五山版の研究」上巻、九三頁、二三〇頁。
- (44) 前掲、高橋秀栄編「版本目録」一一頁。
- (45) 前掲、川瀬一馬「五山版の研究」上巻、四八頁。
- (46) 前掲、図録「法華信仰」五四頁。
- (47) 「弘文莊待賈古書目」第四五号、一九七四年一月、一三四頁。
- (48) 執行海秀「御義口伝の研究」山喜房、二〇〇六年、二〇六頁。
- (49) 前掲、川瀬一馬「中世関東に於ける印刷文化と金沢文庫」一一頁。
- (50) 前掲、高橋秀栄編「版本目録」一一頁。
- (51) 前掲、図録「法華信仰」五四頁。

- (52) 後述するように、小稿で表記する「科註」の丁数は、原則として紙数を単に数えたものではなく、刷られた箇所を対象としたものとする。
- (53) 前掲、拙稿「日隆聖人御所持「心空嘉慶版妙法蓮華經」「科註妙法蓮華經」小考」二二三～二二六頁。
- (54) 前掲、拙稿「日隆聖人御所持「心空嘉慶版妙法蓮華經」「科註妙法蓮華經」小考」二二三～二二六頁。
- (55) 住吉朋彦「五山版の装訂」『立命館文学』第六六四号、二〇一九年十二月、四八一～四八二頁。
- (56) 住吉朋彦「六張一版の説―渡来刻工の刻んだ版本のかたち―」（人間文化研究機構国立歴史民俗博物館編「時代を作った技…中世の生産革命」人間文化研究機構国立歴史民俗博物館、二〇一三年）一九八頁。
- (57) 前掲「よみがえる鎌倉の学問」一八頁。
- (58) 前掲、住吉朋彦「五山版の装訂」四七四頁。
- (59) 住吉朋彦氏は、一面二丁に関して次のように述べている。「日本の版本の実例では一面に二張、表裏で四張の、二張掛けの遺品が多く、同様の印本も認められるが、二張掛けの版では匡郭どうしの空隙が十分に取られ、隣接の匡郭が印紙に映ってしまうことは比較的少ない。」（住吉朋彦「五山版「三註」考」（佐藤道生・高田信敬・中川博夫編「これからの国文学研究のために…池田利夫追悼論集」笠間書院、二〇一四年）三一四頁。但し称名寺本「科註」には左右の匡郭がなく、また刷り残しが散見する。
- (60) 前掲、川瀬一馬『五山版の研究』上巻、四〇頁。
- (61) 五山版と見られる「科註」の装丁に関する問題については、丁数の印字にも注意すべきであることを別稿で指摘した。拙稿「叡山文庫天海蔵「科註妙法蓮華經」小考」『日蓮教学研究所紀要』第五〇号（創刊五〇周年記念号）（投稿中）。
- (62) この点については、別稿でも触れた。前掲、拙稿「叡山文庫天海蔵「科註妙法蓮華經」小考」（投稿中）。
- (63) 住吉朋彦氏は、川瀬一馬『五山版の研究』に採録されている版種かどうか一般には参考にされている現状がある。

ることを述べる一方で、本書は五山版の範囲を相当広く捉えていることから、五山版の意義を不明瞭とする面もあったと指摘している（住吉朋彦「五山版『韻鏡』再考」『学林』第六二号、二〇一六年三月、二二〇～二二二頁）。なお五山版の定義に関して論じた最近の研究に、堀川貴司「五山版をどう考えるか」（藤本幸夫編『書物・印刷・本屋 日中間をめぐる本の文化史』勉誠出版、二〇二一年）二七八～二九二頁があり、同二九〇頁の注（一）で五山版の定義に関する議論の要点を整理している。

〔付記〕

日隆聖人御所持本「科註妙法蓮華経」の画像の掲載につきましては、大本山本興寺御貫首小西日逸猊下より御高配を賜りました。また称名寺所蔵本「科註妙法蓮華経」につきましては、称名寺様より写真利用の御許可を頂き、また金沢文庫様には原本の調査の御許可と写真を御提供頂きました。さらに龍谷大学図書館様には、龍谷大学所蔵本「科註妙法蓮華経」につきまして、改めての原本の調査と画像の掲載を御許可頂きました。加えて大谷大学図書館様には、御所蔵の「科註妙法蓮華経」の画像の掲載につきまして御許可頂きました。なお、元朝史を専門とする牛根靖裕氏（立命館大学授業担当講師・龍谷大学非常勤講師等）には、元版と中心とした筆者の質問に対し、詳しく御教示頂きました。ただし文責は筆者にあります。ここに記し、心より謝意を表します。

〈キーワード〉 科註妙法蓮華経 称名寺 金沢文庫 徐註 五山版 袋綴装